

<https://ws.aifac>

建築学生ワークショップ 明治神宮 1  
architectural workshop MEIJIJINGU

参加学生募集

応募締切

**5.14**  
Call for entry

# 建築の原初の聖地 — 明治神宮

鎮座百年・重要文化財へ  
2021年 明治神宮 開催

「はじめの百年。これからの千年。」

## 明治神宮について

2021年夏、現代に受け継がれてきた、わが国を代表する神社・明治神宮境内にて、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。わが国の正月三が日の初詣では、300万人を越す第1位の参拝者数からも、世界を代表する聖地であるといえ、22万坪（約73ヘクタール）に及ぶ広大な神域と森に囲まれています。内苑と外苑に分かれたこの森は、太古の原生林と見まがう人工の森として存在し、東京で絶滅したはずの生物が数多く生息する場所でもあります。またこの造営には全国から延べ11万人もの青年が勤労奉仕として参加し、鎮座祭は1920年（大正9年）11月1日に行われました。



本殿

## 開催

本開催は、公募した参加学生を5月14日に選出し、8つの班に分かれて、6月5日（土）に全国から東京に集まり、現地調査を開始します。明治神宮では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返して、いま現代に生き、東京で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。



拝殿前

7月3日（土）の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家・構造家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い直し、7月4日（日）の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。



内拝殿

9月12日（日）、この参加学生たちが制作した小さな建築が8体、明治神宮境内に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を1日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。



初詣

## 学び

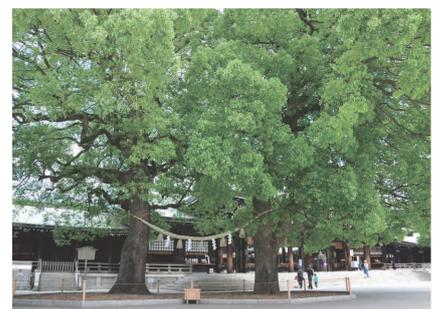
開催には、都内をはじめとした東京都周辺の多くの方たちや、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築に関わる関係者や一般参加者に向けた発表を行います。建築のプロセスに胸を躍らせる3ヶ月。参加学生たちがさまざまな歴史をもつ東京の伝統を学び、この文化に位置づけた解釈を生み、神宮に存在し続ける建築様式に連なり、訪れた人たちの心を落ち着かせ、祈りを捧げるような空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。



春の大祭舞楽



清正井



夫婦楠

# Architectural Workshop MEIJIJINGU 2021

開催場所 明治神宮境内（東京都）

明治神宮は、わが国正月三が日の初詣では、300万人を超す第1位の参拝者数からも、世界を代表する聖地であります。



## 現地滞在スケジュール

6月05日(土) 参集殿  
現地説明会・調査(日帰り)

7月03日(土) 参集殿  
提案作品講評会(1泊2日)

04日(日) 参集殿  
実施制作打ち合わせ(1泊2日)

9月07日(火) - 13日(月) 営繕詰所  
合宿にて原寸制作(6泊7日)

9月12日(日) 明治神宮会館  
公開プレゼンテーション

※参加申込の際に、全日程の予定を確認してからお申込みください。

6月19日(土) 午後  
各班エスキース(東京・大阪会場)

## 開催期間

2021年9月07日(火) - 9月13日(月) 6泊7日

※合宿にて原寸制作

※9月12日(日) 参集殿にて公開プレゼンテーション

## 参加費用

実費 (宿泊費、保険代、資料費等 ¥35,000 事前徴収制)

※現地までの交通費・食費は各自別途負担となります。

※開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

## 参加申込

ウェブサイトからお申込みください

<https://ws.aaf.ac>

※参加者募集期間 2020年9月21日(月)~2021年5月14日(金) 23:59(必着)

※参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生  
【参加学生】定員:60名程度(大学院生8名+参加学部生42名+運営サポーター10名)  
8グループを予定

ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。

【運営サポーター】定員:5~10名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中)

開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません)

※交通費・食費 各自・自己負担

## 参加予定講師

日本の文化を世界へ率いる方々を中心として、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただきます。

伊東 豊雄 (建築家 | 伊東豊雄建築設計事務所 主宰)

太田 伸之 (クールジャパン機構 前社長)

建畠 哲 (美術評論家 | 多摩美術大学 学長)

ナガオカケンメイ (デザイン活動家 | D&DEPARTMENT ディレクター)

南條 史生 (美術評論家 | 森美術館 特別顧問)

小松 浩 (毎日新聞社 主筆)

五十嵐太郎 (建築史家・建築批評家 | 東北大学 教授)

稲山 正弘 (構造家 | 東京大学 教授)

江村 哲哉 (構造家 | アラップ構造成造エンジニア)

倉方 俊輔 (建築史家 | 大阪市立大学 准教授)

腰原 幹雄 (構造家 | 東京大学 教授)

櫻井 正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)

佐藤 淳 (構造家 | 東京大学 准教授)

芦澤 竜一 (建築家 | 滋賀県立大学 教授)

遠藤 秀平 (建築家 | 遠藤秀平建築研究所 主宰)

竹原 義二 (建築家 | 神戸芸術工科大学 客員教授)

長田 直之 (建築家 | 奈良女子大学 准教授)

平田 晃久 (建築家 | 京都大学 教授)

平沼 孝啓 (建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)

藤本 壮介 (建築家 | 藤本壮介建築設計事務所 主宰)

安井 昇 (建築家 | 桜設計集団 代表)

安原 幹 (建築家 | 東京大学 准教授)

横山 俊祐 (建築家 | 大阪市立大学 客員教授)

吉村 靖孝 (建築家 | 早稲田大学 教授)

## 建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の聖地から” 伝えたいことを、空間として表現してください。

2021年夏、現代に受け継がれてきた、わが国を代表する神社・明治神宮神域にて、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。わが国の正月三が日の初詣では、300万人を超す第1位の参拝者数からも、世界を代表する聖地であるといえ、22万坪(約73ヘクタール)に及ぶ広大な神域と森に囲まれています。内苑と外苑に分かれたこの森は、太古の原生林と見まがう人工の森として存在し、東京で絶滅したはずの生物が数多く息づく場所です。将来を担う学生たちが今という時代に向き合い、この場所ですることにより全力で取り組む。新たに建築空間の力を備えて「実際につくる」という取り組みは、大変貴重な試みです。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、未来を創造する提案をしてくれることでしょう。

## 【スケジュール】

5月6日(木) 参加説明会開催(東京大学) 五十嵐太郎

5月12日(水) 参加説明会開催(京都大学) 倉方俊輔

5月14日(金) 23:59 必着 参加者募集締切(参加者決定)

6月5日(土) 現地説明会・調査

6月19日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)

7月3日(土)~4日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ

3日(土) 提案作品講評会

4日(日) 実施制作打合せ

7月5日(月)~9月6日(月) 各班・提案作品の制作

9月7日(火)~9月13日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル

7日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り

9月12日(日) 公開プレゼンテーション

13日(月) 撤去・清掃・解散



明治神宮と表参道



大鳥居

## 【制作内容】

“唯一無二の歴史的風土を守るために、あなたの提案を実現してください”

原寸模型を地域産材(自然素材 / 木材、和紙、土、石など)の材料で制作

# Architectural Workshop MEIJIJINGU 2021

## 開催記念 説明会 講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」は 2021 年、9/7（火） - 13（月）に明治神宮境内にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍される建築史家に自身の学生時代の体験を通して、現在の研究や取り組みにどう影響しているのかをレクチュアしていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

### 東京会場

#### 東京大学 (弥生キャンパス) 農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩 3 分  
東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩 10 分

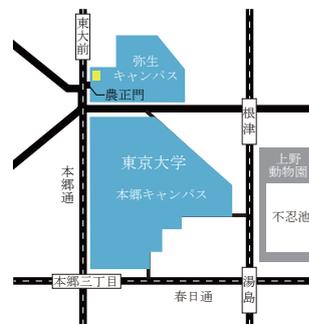
**5月6日|木| 18:30 - 20:00 (18:00 開場)**

入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。  
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。  
※ウェブサイトを再度ご確認ください。



#### 基調講演 **五十嵐太郎** (建築史家)

1967 年生まれ。1992 年、東京大学大学院修士課程修了。博士 (工学)。現在、東北大学大学院教授。あいちトリエンナーレ 2013 芸術監督、第 11 回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッショナー、「窓学展一窓から見える世界」「インボッシブル・アーキテクチャー」の監修を務める。第 64 回芸術選奨文部科学大臣新人賞、2018 年日本建築学会教育賞 (教育貢献) を受賞。『ル・コルビュジエがめざしたもの - 近代建築の理論と展開 -』(青土社)、『モダニズム崩壊後の建築 - 1968 年以降の転回と思想 -』(青土社) ほか著書多数。



### 京都会場

#### 京都大学 (吉田キャンパス) 百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩 10 分  
京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩 10 分

**5月12日|水| 18:30 - 20:00 (18:00 開場)**

入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。  
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。  
※ウェブサイトを再度ご確認ください。



#### 基調講演 **倉方俊輔** (建築史家)

1971 年東京生まれ。大阪市立大学准教授。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院博士課程修了。伊東忠太の研究で博士号を取得後、著書に『神戸・大阪・京都レトロ建築さんぽ』、『東京モダン建築さんぽ』、『吉阪隆正とル・コルビュジエ』、『伊東忠太建築資料集』ほか多数。日本最大級の建築公開イベント「イケフェス大阪」、品川区「オープンしなげん」、Sony Park Project に立ち上げから関わる。日本建築学会賞 (業績)、日本建築学会教育賞ほか受賞。



2010 奈良・平城宮跡 2011 滋賀・竹生島 2015 和歌山・高野山 2016 奈良・明日香村 2017 滋賀・比叡山 2018 三重・伊勢神宮 2019 島根・出雲大社 2020 奈良・東大寺

主催

特別協賛

© AAF 知性あふれるレクリエーションを。 Art & Architect Festa  
NPO/AAF Art&Architect Festa 特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ ウェブ www.aaf.ac エメール info@aaf.ac

明治神宮

AGB  
旭ビルウォール株式会社

## 座談会 | “はじめの百年。これからの千年。鎮座百年・重要文化財へ”

### 建築学生ワークショップ明治神宮 2021

水谷敦憲(明治神宮 | 禰宜 管理部部長) × 廣瀬浩保(明治神宮 | 禰宜 宝物管理部部長)

× 黒田泰三(明治神宮 | 明治神宮ミュージアム 館長) × 腰原幹雄(構造家 | 東京大学生産技術研究所 教授)

× 櫻井正幸(エンジニア | 旭ビルウォール 代表取締役 社長) × 平沼孝啓(建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)



座談会の様子 (明治神宮にて)

———全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、場所を移しながら開催してきました。歴史と場所の特性をはっきりと持つ開催地と、周辺の生活文化を合わせて調査することにより、観光として訪れるだけでは知りえない、街や地域との関わりや建築を保全していく造り方の技にも触れ、制作を含めた実学としての地域滞在を叶えます。神聖な場所の静粛な空間からコンテクストを見出し、現場で建築の解き方をさぐるきっかけを経験していきます。わが国の正月三が日の初詣では、300万人を越す第1位の参拝者数からも、世界を代表する聖地であるといえる明治神宮は、22万坪(約73ヘクタール)に及ぶ広大な神域と森に囲まれています。内苑と外苑に分かれたこの森は、太古の原生林と見まがう人工の森として存在し、東京で絶滅したはずの生物が数多く生息する場所です。また、造営には全国から述べ11万人もの青年が勤労奉仕として参加し、鎮座祭は1920年(大正9年)11月1日に行われ、令和2年にちょうど百年を迎えます。境内にある宝物殿13棟が重要文化財である近現代における主要都市のまちづくりで最も貴重となる「聖地」。この清らかな場に身を置き、かつ歴史環境を現代にも残す貴重な環境の中で、全国から集まる建築学生らが伝統的な構法に触れ、この場に位置づけた建築の解釈を生み出したいと考えています。つまりこの場所の特性を用いるため、「歴史」「場所性(地形)」「現代の問題」の3つの観点から提案に求めるものを探り、現代に受け継がれてきた明治神宮で、空間性へのテーマや実現へのコンセプトのヒントとなる話題を、この座談会を通じてお聞かせください。

本日は開催地として多大なご尽力をくださいます明治神宮にて、全国の参加学生に向けてお導きをくださる、水谷管理部長をはじめ、廣瀬宝物管理部部長と、明治神宮ミュージアム黒田館長にもご参加いただき、本年、令和2年11月の「鎮座百年祭」を終えた翌年の開催についてお聞きしたいと思います。皆さま本日はどうぞよろしくお願いいたします。

平沼: 1912年(明治45年)に明治天皇が崩御され、立憲君主国家としては初めての君主の大葬であったことから記念するための行事が計画され、東京に神宮を建設したいとの運動が天皇を崇敬する東京市民から起こり、造営が進んだと伝えられています。つまり民意の寄付や労力で造営されたのがこの明治神宮ということでしょうか。また、この地が現代にまで続く聖地のような神聖な場所となり現代にも継いで来られた思想の背景と、この原宿・代々木周辺に暮らす人たちの当時の生活文化はどのようなものだったのでしょうか。建設にこの地が選ばれた意図などもお聞かせください。

廣瀬: 平沼先生のご指摘の通りこの明治神宮誕生の歴史は、明治45年の明治天皇の崩御に遡ります。夏目漱石の「こゝろ」の有名な一節がございます。「すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時、私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました」というものです。当時の日本は、日清・日露戦争など、開国以来数々の国難が重なり、明治天皇を心の支えとして乗り切ってきた人々にとって崩御というのはまさに、目の前が真っ暗になることであったと思います。そして、その崩御当日の7月30日には早くも、東京市長の阪谷芳郎が宮内次官に、また日本橋区会議長の柿沼谷蔵が渋沢栄一に東京の陵墓の選定を哀願していますが、天皇のご遺言から陵墓は、伏見桃山となりました。そこで御陵選定の請願運動は天皇を祀る神社の創建運動へと大きく転換いたします。その後、この代々木に鎮座地が決まり、大正4年から造営が始まりました。造営に際して「3大美談」というものがあります。1つ目は、全国からの約10万本の木の奉納があったこと、2つ目は延べ11万人に及ぶ青年団の勤労奉仕があったということ、3つ目は、一般の国民の会である明治神宮奉賛会の寄付によって造られた外苑が明治神宮に奉獻されたということです。民意をきっかけにした多くの民衆の尽力によって造営されたのが明治神宮だといえます。

水谷：鎮座地選定に際し、埼玉の朝日山や宝登山、東京の御嶽山やもちろん富士山もそうですが、様々な地から手が挙がりました。その中から候補地が東京に絞られて行き、明治天皇に最もゆかりの深い場所が選ばれ、この代々木の南豊島御料地に決まりました。今日皆様と会えるこの隔雲亭は、明治天皇の皇后である昭憲皇太后のために建てられ、皇后様が度々行啓になられた場所です。この御苑は江戸時代から加藤家や井伊家の下屋敷の庭園でもあり、加藤清正が掘ったと伝わる井戸が現存し、パワースポットとして、注目を集めております。また、明治天皇の思召しにより花菖蒲が植えられ、毎年6月になると花菖蒲を見に大勢の方がお越しになられます。この建物は、東京大空襲がありました昭和20年5月に焼失し、昭和33年の御本殿復興に合わせて再建されたものです。元々この社は、御苑以外の正参道や御本殿周辺を始め境内全域、野原でした。そのような場所を全国から延べ11万人もの青年団の方々が、勤労奉仕で参道をつくり木を植えられました。

腰原：参道ができる前の何も無い野原、この表参道の写真を見たことがあるのですが、この隔雲亭は、ポツンと建っていたのですか。

水谷：隔雲亭は、明治33年から御苑の中にありましたが、今は鬱蒼と茂っている森も当時は何本かが植わっているような状態でした。ここ代々木の地名の元となったモミの木の子二代目が境内にありますが、当時は大変な巨木で東京の下町からでも目印になったそうです。また御社殿につきましては、昨年開催の出雲大社、一昨年開催の伊勢神宮とは異なり、明治神宮は式年遷宮がないのが特徴です。しかし、昭和20年の4月の空襲で何千発という焼夷弾が落とされ御社殿は焼失してしまい、現在の御社殿は昭和33年11月の復興です。結果として二度、造営される都度、当代一流の建築技術者の方々が建築様式のみならず資材についても侃侃諤諤の議論をされた非常に珍しい神社だと思います。大正の創建時には、建築様式も出雲大社のような大社造りや、伊勢神宮のような唯一神明造りなどの案も出されました。しかし文明開化を進められた明治天皇ですから、記念館のような建物が良いのではないかと、また資材につきましても、木造ではなく石やレンガ、鉄筋コンクリートなどの不燃物という案が議論されています。実は私の大学の卒業論文が神社建築について、築地の本願寺のような日本的ではない建物を設計した当時造営局の参与伊東忠太先生が、なぜ流造を採用したのか非常に興味を持ちこの辺りの研究を致しました。伊東先生は当初、革新的な提案をされて居られましたが、やはり神社という特別な建物で、精神的、神秘的なものを持っていないとかならないというお考えに変わられた記録が残されて居ります。最終的には神社として、一般的様式を大成して建築としても進歩の域に達したのは「流造」であるという意見が出され、木造の流造に決定しました。



水谷敦憲  
(明治神宮 | 禰宜管理部部長)



腰原幹雄  
(東京大学生産技術研究所教授)



黒田泰三  
(明治神宮 | 明治神宮ミュージアム館長)



平沼孝啓  
(平沼孝啓建築研究所主宰)

屋根も檜皮か銅板のどちらの材で葺くのかと議論がされ、現在とは異なり檜皮葺となりました。また、昭和33年の復興の際にも同様に建築様式と資材について、角南隆先生を中心として議論がなされ、二度と再び焼失してはならないと鉄筋コンクリート造が主流を占めておりましたが、我々の大先輩、時の権宮司が明治神宮側の意見として、「最も大切なことは神聖感の維持であり、その中に日本の歴史を感じさせ、神霊の鎮まり給う雰囲気を感じさせること。また、明治天皇様は非常に進歩的な方であったと共に伝統の維持も尊重され、神社建築に関しては、木造建築こそ望ましいと仰せられたとも承っておりますので、御社殿以下玉垣内は木造、それ以外は鉄筋コンクリート造で」と述べられ、最終的にはその様に復興されました。

腰原：歴史の中で、おそらく再建というのも一つの節目なのかもしれませんが、ここの役割が変化するというか、こういう役割を果たさなければいけないというきっかけになる時期はありましたか。

水谷：昭和50年代の元号法制化の国民運動などが起こった頃ではないでしょうか。あの頃は日本古来のものを守り伝えて行こうと発信していかなければならないという動きがありました。明治神宮が何かを発信すると、社会的な注目を集めるということもありますから。

腰原：最近、私たち日本人の意識が大きく変わっている感じがして、いまこそ未来を考えなければいけないという風潮にも色々な変換期のようなイメージがあります。昨年ミュージアムも開館され、過去を継ぎながら次のステージを考えようという時でもあるんだと思います。そういう意味で、100年というのがきっかけなのか、そういう時代だからなのか分かりませんが、明治神宮もひとつの転換期なのではないでしょうか。

廣瀬：そうですね。日本の守り神としてのご存在が終戦を経て、海外からの方々も多く祈りを捧げる神社になったということは非常に興味深いことです。この世のすべてが平和であってほしいという明治天皇・昭憲皇太后の願いを多くの方々が感じとり、国を超え、宗教を超えた、普遍的な祈りのプラットフォームになっているのではないかと思います。

黒田：私は、伝統というのは、一つのをずっと守り続けていこうとする考え方ではなく、色々試してみても革新しようとした結果、変えることができなかったものが伝統として残っていると考えています。伊東忠太先生は先進的なものをお考えになられ、伝統的な神社建築に還っていかれたということは、そういう伝統と

革新の考え方を、社殿で実践されているのではないかと思います。つまり 100 年の歴史の中で、やはり伝統的な考え方や、形に収斂していくのでしょうか。しかしそこに至るプロセスでは、かなり新しいものを取り入れて、適合しようとしています。そういうことを求めているというのには強く感じます。

腰原：歴史環境を継ぐこういう聖地で学生たちが造ると、歴史を読むよりその形態に引っ張られてしまうんです。ここにはこんな歴史があるからということに引きずられ過ぎて「わかりやすい」形を表現したものになってしまいます。やはり歴史を読み解いてその文脈を継ぎ、現代の技法に合わせた未来を予感する先進的な工夫がなければいけませんね。これから 100 年を考えると、前の 100 年と同じことをしても、社会も地球環境も全て変化してきているわけですから、このままではいけない。チャレンジして生き残れるかどうかは別として、やはりどこかで見直してみるという作業をし続けることが大切だと思います。また、そうすることで続くのだと思います。社寺建築系は、やはり悪い意味では伝統に引きずられ過ぎてるところがあります。守らなければいけない意識がある。

平沼：参加学生たちは、この流造だけを形態的に模倣したくなるのですよね。

腰原：そう、本当はもっと種類があるということを知らな過ぎる。明治神宮の場合は、森から生まれる建築というのが出てきてくれるといいなと思うんです。人工林でさえも 100 年経てば自然の世界です。今は人の力で守られています、本当は人工物としてそこから生まれてくる産物があるという世界も、昔の里山的に考えればあるはずなんです。

黒田：まさに仰るようにほぼ自然の杜に近づいてきていると言われますし、そこから私たちが日常的に得ているものがきつとあると思うんです。それを可視化したものを通して、明治神宮あるいは神宮の杜のことをさらに理解してもらいたいというのが、オープンしたミュージアムの理念の一つです。

腰原：ワークショップも全く同じです。学生にはその辺りのことをもう少し勉強する時間を持ってほしい。皆さんが 100 年間守り続けた場所へ行き、そこで何かを感じて、そこに何をすべきかということ、提案してもらいたいという思いがあります。突然、どこかの土地にぽーんとつくりましょう！ではなく、周りに守ってきた人も建物も含めた教材が聖地にはあるわけです。それを見て、どう感じて、自分たちがこれからどうあるべきかというのを



座談会の様子

考えるというのがテーマです。ぜひ、皆さまには、そういうちょっとした見出しをいただければと思います。

黒田：学芸員生活をおくる中で、特に日本の近世絵画史を勉強してきました。もう 30 年以上、絵の歴史を専門にしているのですが、学び得たものに日本の美というのは、ディテール、細部にありと思うようになりました。やはり細部がものすごくよくできているものは、全体も非常にすばらしいのです。その全体のすばらしさを見たり、細部のすばらしさを見たりを行ったり来たりすることが、私が考えている日本の美の鑑賞方法と思うようになったのです。それに基づき、細部に美しさが宿っているということを伝える展示室にしたいというプランが固まっていく過程で、では日本人のどういう特性がそういうことをさせたのかということに当然考えなければいけないと思いました。その答えを明治神宮の杜の中で見つけられないかと思ったんです。明治神宮の杜は広いですからどこへ移動するにもかなり歩かなければいけません。例えば社務所に行く時に寄り道して、御苑に入り、遠回りして杜の近くを通る。何度も何度も通るうちに、人工林ではあるけれどやはり自然林に近づいてきているという旨の話が頭の中に浮かんでくるわけですね。そうすると、段々杜が持っている神秘性みたいなものに気づき始めた。それはある意味、スピリチュアリズムにも通じていると思うようになってきたんです。そして水谷部長や廣瀬部長の日頃の所作を見ればわかることですが、たくさんの神職の方が、祭事の時はもちろんですが、それ以外の日常でも本当にきちんといらっしゃるのです。お召しになっている装束も、日本古来の、自然から発した伝統色を使った美しいものです。明治神宮の外から来たばかりの私は、この方々はなんて「折り目正しい」人たちなんだろうと思いました。そして、きちんとしているすなわち「折り目正しい」ということは、日本人の美学に通じるのではないかと確信するに至りました。どうして明治神宮の神職の方はこんなにきちんとしてらっしゃるんだろうと考えていくと、杜の中にいらっしゃることが関係あるのかなと思いました。無縁ではないだろうと。つまり杜に対してやはり日本人が昔から持っている畏敬の念や謙虚さや誠実さ、そういうものを目の当たりにしたような気がしたのです。ですから、その折り目正しさというのは実は杜に真摯に向き合っておられる方に自然と身につくような、それこそ特性だと思います。明治神宮に所蔵されている美術工芸品は、明治天皇がお使いになっていたもの、昭憲皇太后がお使いになっていたものなど、そして明治神宮に奉納されたものばかりです。言い換えると作り手が、名利が欲しくてした仕事ではなく、本当に明治天皇、昭憲皇太后のため明治神宮のためという気持ちでつくっているわけです。すなわち、完成した品々のどこを見ても、隅々にいたるまでその思



廣瀬告保  
(明治神宮 | 禰宜宝物管理監部長)



櫻井正幸  
(旭ビルウォール代表取締役社長)

いが細部の美しさとなって造形されているのです。その技は、私は「折り目正しさ」という、やはり日本人の美学と言ってもいい姿勢が支え存在すると思うのです。このような日本の美術工芸品に宿る日本の美を、ミュージアムの展示で伝えたいと思うようになったのです。

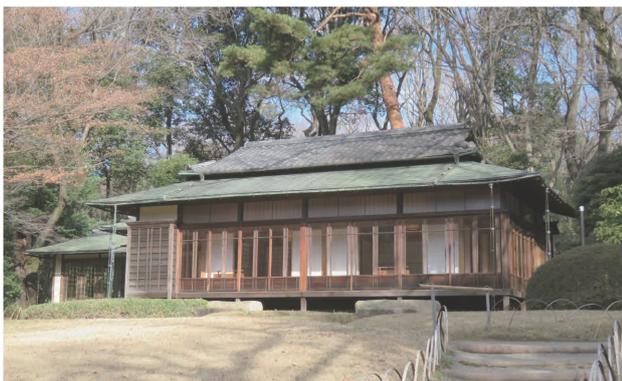
櫻井：実は本日、初めて明治神宮に参らせていただいたんです。学生の頃に初詣に来ましたら、あまりにも人が多いことに驚き、恥ずかしながら帰りました。京都で生まれたことも要因して、歴史と伝統がたくさん感じられる場所にいると、足が向かなかつたというのが正直なところだったのですが、お話を伺い1番びっくりして恥ずかしいなあと思ったのが、民意で建てられたところなんです。時の権力とか、宗教とかそういうものではなくて、民意で建てられた経緯から、今、館長が仰っていた話があるのだなと思いました。また、まさかこの場でディテールという言葉を知るとは思いませんでした。私はエンジニアとして、ディテールを最も大切に思ってきましたし、当社が市場から必要とされるようになった理由の大きな1つでもあります。特に日本の材料というのは、その耐久性からも儂い素材です。儂いものや弱いものを、長く使う知恵や工夫から美しさのディテールが生まれてきたと思っています。

黒田：そうですね。隈研吾先生設計のこのミュージアムは、柱に溶け込むように配慮され、軒先がとても薄く作られています。軒先を薄くすると建物の存在感があまり強調されずに、柱に溶け込むのだそうです。とても美しい建物です。しかし若い学生の方たちには、この建物の美しさをじゅうぶんに理解されたうえで、柱と対峙し、もしかすると異物感のあるものを提案してはどうでしょうか。

平沼：御本殿の銅板の葺き替えをされ、ミュージアムもそれに合わせて準備されてきたと思うのですが、あの場所を選ばれた理由をお聞かせください。

廣瀬：もともとバスの駐車場であった場所で、なるべく木を切らないで済むこと、またアクセスの良い原宿から近い場所であることなどが選定の要因でした。

平沼：森あつての神宮。御本殿あつての明治ですね。館長が仰った折り目正しい所作の美しさを、神職の方や、美術館で働いている学芸の方たちもみんなお持ちで、共通するところがあるんですね。そういうことからコンセプトに結びつけ、隈建築に対峙するのではなく、森の影響を美しさで引き出していけるといいですね。



隔雲亭

櫻井：さっき仰った美って、見える美と見えない美がありますよね。折り目正しいと仰ったのは、見えない部分のディテールですよ。見える美しさ、見えない美しさの両方を工夫してこの場所で表現できたら凄いことだと思います。

平沼：今回の計画候補地は、原宿駅から第一鳥居前付近、南参道から第二鳥居とそして、玉垣まわりの本当に貴重な設置箇所を10カ所、お預かりいたします。その中で鳥居前付近の候補地を4ついただいておりますが、鳥居に影響される学生が多くいると思います。

水谷：私が作品を造るなら第二鳥居前ですかね。第二鳥居は、高さ12m、幅が17.1m 柱の太さが直径1.2m 重さ13tです。木造の明神鳥居としては日本一の大きさということですが、鳥居はそれ自体が御神木ではなく、信仰の対象でもない。よく「結界」だと言われます。なお、建築作品での表現については、自由に創造いただいて結構ですよ（笑）。

櫻井：（笑）お優しい。俗世と聖域というのはそこに一步入るか、入らないかの違いだけです。日本人が持っている最高の壁は、鳥居なんだということをお聞きしたことがあります。とても面白い表現ですよ。ロープでも構わないけれど、鳥居という境界の位置づけをもつ文化は、素晴らしいことだと思います。

黒田：参加学生の方が建築をつくられる際に使われる素材は自由ですか？

平沼：地域にある自然素材で、リユースかリサイクルでき、なるべくゴミを出さないものを求めています。

腰原：接続する金物などは仕方ありませんが、インターネットで購入するような流通材ではなく、地域の方たちに頼り集めてくるような素材です。空間を構成する構造材を含めた素材選びや、素材の入手からものづくりが始まっているということをお聞かせください。

水谷：明治神宮では「明治神宮御境内林苑計画」に基づき100年近く、落ち葉は焚き火にせず、折れた枝も森に還すのが基本で、動植物の持ち出しも禁止しております。つまりは希望があれば提供可能な素材を「これ持って行って良いよ」と？（笑）

平沼：（笑）開催が始まりましたら現地説明会の時期にそういうお話をショートレクチャーでお聞かせいただけたら大変ありがたいと思います。学生たちはそれを手掛かりに取り組みますので、どうかお願いいたします。

（令和2年2月20日 明治神宮 隔雲亭にて）

——— 大変貴重なお話をお聞かせいただき本日はどうもありがとうございました。このワークショップが参加学生にとって、とても貴重で意義深いものになると 생각합니다。そして将来、この場所で開催した意義につながるような提案作品を募りたいと思います。